

# オープン カレッジ

2024年7月3日に約20年ぶりの改刷が行われた。前回は04年11月1日、前々回は1984年11月1日に行われており、さながら金融における伊勢神宮の式年遷宮のようである。ところが今回は、前回、前々回の改刷と比べるとさまざまな点で大きな違いがある。

第一に、銀行券の構成における一万円券のウェイトの拡大である。総額に占める一万円券の金額ウェイトをみると、前々回改刷の84年11月時点で83・9%、前回改刷の04年11月時点で90・2%を占めていたのが、

## 日銀券改刷で現れた問題点

ると、84年改刷時、04年改刷時がともに70%台であったのが、今次局面では改刷直前の1年間に於いて90%台後半の寄与率となつている。すなわち、日本銀行券前年比の動きは一万円券でほぼすべて説明できる状況にまで一万円券への券種的な集中が進んでしまつてい

る。第二に、現金需要が改刷時点においても減少を続けていることである。日本銀行券発行高前年比の推移をみると、今回の改刷において日本銀行券発行高の前年比は改刷7カ月前の23年12月からマイナスとなり、24年8月の時点でもマイナスを続けている。ちなみに04年の改刷時にはその8カ月前の+0・5%をボトムに、84年の改刷時にはその9カ

行設置ATMの台数は2000年をピークに減少に転じ、最近ではスマートフォンなどを利用したキャッシュレス化の進展や金融機関のコスト意識の高まりを反映して一段と減少が進んでいる。こうした中で今後のさらなる現金需要の減少を予想する向きは少なくない。

第四に、こうした環境変化にも関わらず、傾向的に家計保有の現金残高が大きく増加していることである。資金循環統計によれば24年6月末時点での家計の現金保有額は103・8兆円に達し、これは前回改刷に近い04年末43・7兆円の2・4倍である。ちなみに名目GDPに対する現金流通高の比率をみると、04年末に15%弱と諸外国と比べて元々突出して高かったのが、24年6月には20%程度にまで膨れ上がっている。この点に関しては、高齢化を背景とした予備的動機や節税などを図るためにタンス預金が増加していることが指摘されている。

# 過去の改刷との 大きな変化

改刷直前の24年6月末時点で93・2%とさらに上昇した。ちなみに日本銀行券全体の伸び率(前年比)における一万円券の寄与率をみ



植林 茂  
Keio University  
Department of Modern Management  
Professor

月前の+0・9%をボトムに伸び率が上昇に転じていたことと比べると、状況は大きく異なっている。新紙幣に対する需要は、過去の改刷局面ほど強くないのである。

第三に、ICTなどの技術進歩による金融・社会環境の変化が顕著なことである。諸外国と比べて進展が遅れているとはいえ、わが国においてもかなりのスピードでキャッシュレス化が進展している。また、金融情報システムセンターのデータによれば、全国銀

わが国は政府間協議である金融活動作業部会(FATF)から21年8月に公表された金融活動作業部会(FATF)の第4次対日相互審査の報告書でマネーロンダリングについての対策が不十分である「重点ブローアップ国」と評価されているほか、タンス預金が増加していることが著しく多い、不透明な面を持つ国としてよく知られている。こうした状況に鑑みれば、次回改刷までに中央銀行デジタル通貨の発行を真剣に検討すべきであろう。

うえばやし・しげる 金融。  
埼玉大学大学院経済科学研究科  
博士後期課程修了 博士(経済学)  
日本銀行、埼玉大学大学院  
客員教授などを経て現職。